博士学位請求論文　要旨

E・レヴィナスの現象学的分析における諸現象の構造としての「関係」と「隔絶」

中央大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程
高野浩之

１．本論文の主題

本論文は，エマニュエル・レヴィナスがおこなった現象学的分析で扱われる諸現象を，「関係」と「隔絶」という観点で，考察したものである．レヴィナスは他人の顔との関係における顔の他性を強調する哲学者として知られている．主体としての人間がある他人の顔と関係するとき，この顔は主体をどこまでも超越するとされる．とはいえ，主体と他者が「関係する」のであれば，他者は「超越」することなどできないのではないか.「関係」自体がそもそも「相対的」ないし「相関的」という意味を含意してしまうとすれば，レヴィナスの求める，絶対的他性を肯定できる自他関係など，はじめから不可能ではないのか．こうした問題が考えられる．本論文では，この問いにたいして次のように応答する．すなわち，主体と他者のあいだに存する「関係」と「隔絶」という本来は相反したふたつの特徴がひとつのできごとのうちに同時的に成立しており，しかも自他にとって「関係」と「隔絶」こそが本質的なものとして機能しているのである．本論文は，この抽象的な規定を，諸現象の分析をとおして，具体的に補っていくことをめざしている．

さて近年，レヴィナスの哲学を他者論よりも主体性論として読むべきであるとする研究がなされつつある．また，かつてレヴィナスは現象学を神学へと転回させてしまった張本人のひとりとして批判されたが，しかし近年多くの研究で，彼が抽象的概念を具体化することに重きを置いた現象学を実践しているとして擁護する動きがある．本論文は，こうした研究動向にしたがいつつ，主体の唯一性を成立させるために要請される他者の他性がどのように〈他〉として確保されるのかという問題意識をもって考察にあたった．そのためにも，レヴィナスの分析する現象がそれぞれ独特の仕方で，構造的に関係項同士の「関係」と「隔絶」を実現していることを，見いだそうと努めた．

本論文では，レヴィナスの前・中期の作品を中心に，そこで扱われる諸現象をその現れ方（ないし現れない仕方）の構造に着目して分析している．近年の研究で，とくに前期レヴィナスの考察を，後期思想の観点から分析し，前期思想に後期のそれの萌芽を見いだすような研究姿勢に疑問が提示されている．本論文は，思想史的背景からレヴィナスの位置づけを考察するような研究ではないものの，後年の思想からの回顧的な解釈はなるべく避けて，各著作に内在的に現象分析をおこなっている．

また，本論文がとりあげている諸現象は，たがいに独自の構造を有しているものの，だからといってそのすべてが相互にまったく関係のない独立した現象であるわけではない．むしろ，とくにレヴィナスの主著『全体性と無限』で扱われている諸現象，人間の存在諸様態が相互にどのような関係にあるかという点に，最近の研究では注目が集まっている．本論文でも，錯綜を極めるこの問題に一定の解釈を提示している．

２．本論文の構成

序章
第１章　「吐き気」と「疲労と努力」
　はじめに
　第１節　「逃走論」における「吐き気」
　　１－１．「逃走論」における「吐き気」の分析
　　１－２．ロランによる「吐き気」の考察
　第２節　『実存から実存者へ』における「不眠」と「ある」
　第３節　アンセルの「自給自足体制 (autarcie)」について
　第４節　『実存から実存者へ』における「疲労と努力」の現象学と「瞬間」論
　　４－１．「疲労と努力」の現象における「瞬間」の生起
　　４－２．「瞬間」から「ある」へ
　おわりに
第２章　『時間と他者』における「死」
　はじめに
　第１節　ハイデガーの死についての議論
　第２節　ペリュションの解釈からデリダ『アポリア』の議論へ
　第３節　シオカンの解釈
　第４節　『時間と他者』における「死」の分析について
　おわりに
第３章　『全体性と無限』における「内部性」から「外部性」へ
　はじめに
　第１節　わが家の機能（１）:「自己への立ち返り (le recueillement)」の条件
　　１－１．享受の幸福と明日への憂慮
　　１－２．「自己への立ち返り」を可能にする「わが家」
　第２節　わが家の機能（２）：家政的な生活の条件
　第３節　わが家の機能（３）：表象と倫理の条件
　　３－１．表象
　　３－２．表象の批判的本質とわが家
　　３－３．表象と言語
　　３－４．哲学的思考の可能性の条件としての恥
　おわりに
第４章　顔との関係における外部性
　はじめに
　第１節　言説の形式的構造
　第２節　顔における非対称性
　第３節　言説における時間性
　　３－１．過去の時間性

３－２．未来の時間性と第三者
おわりに
第５章　『全体性と無限』における「私の死」について
はじめに
第１節　問題の所在
第２節　『全体性と無限』における「私の死」
２－１．ハイデガー批判について
２－２．レヴィナスによる私の死の切迫にかんする分析
２－３．死の悪意と間人間的次元の肯定
おわりに
第６章　顔の彼方としてのエロス
はじめに
第１節　対話関係の公共性について
第２節　エロスにおける自他の二元性
２－１．エロス的関係における自他の分離
２－２．エロスの共同体
第３節　「顔の彼方」としてのエロス
おわりに
終章 —— 今後の課題

第１章では，「吐き気」と「疲労と努力」の現象が主題となる．ここでは，自他の分離とその取り戻しの同時性が見いだされることになる．前者は，現象の構造として，完全な仕方で自己自身に閉鎖したあり方を示すのにたいして，後者は自己の取り戻しにおいて「ある(Il y a)」という匿名的な存在一般へと開かれてもいる二義性があるという点が指摘される．

第２章においては，『時間と他者』をテキストとして，そこでの「死」の記述を考察する．死との関係にあって，人間は自己の存在を支配する権能を喪失することが見いだされ，ハイデガーとは正反対の仕方で，死の他性が肯定されることになる．従来の研究では，中期以降のレヴィナスの論点である他者の死の重要性という観点から，前期レヴィナスの「死」の分析が読まれる傾向があった．本論文では，それを排して自己の死の観点から前期レヴィナスの「死」の記述を読み直すことにする．死の他性の本領は，その了解不可能性にあるとされることが多いが，しかし死の他性は了解という態度自体が放棄されているという点に求められるべきであろう．

第３章は，『全体性と無限』において記述される「内部性」と「外部性」のつながりについて検討するものである．内部性とは，世界のなかで生きる人間の存在様態の諸層が有する構造を包括する術語である．この章で分析される人間の存在様態はおもに「享受」，「わが家」，「労働と所有」，「表象」である．これらはそれぞれが相互に緊密に連関している．しかし本論文でとくに注目したいのは，「わが家」と「表象」である．というのも，この両者は外部性との結節点にあり，独特の仕方で他者とかかわっているからである．この章における内部性の分析の結果として，『全体性と無限』において内部性は外部性へと乗り越えられる弁証法的契機であるとする解釈傾向への批判がなされる．

第 4 章は，「顔」をテーマとしている．とくに顔との関係における時間性を考察する．この章では，前章でも触れられる「言説」が主題化され，顔との関係において起動する他人との言説関係が検討対象となる．言説においては，発話の現在から，独特の過去と未来が生起する．言説という仕方で他者と関係しつつも，この関係は関係する者同士を絶対的に隔絶するものでもあるということが明確化されるだろう．またこの章で，言説関係における第三者性と公共性に注目することも，本論文の特徴となるだろう．

第 5 章では，先の第 2 章での議論にも触れつつ，『全体性と無限』における「私の死」について考察する．同著では，『時間と他者』以上に具体的な考察が展開されており，この章では，その観点から，ハイデガーとの差異にもあらためて言及されることになる．さらに，『時間と他者』では，「死」そのものの他性が問題となっていたのにたいして，『全体性と無限』では，主体みずからの死が他人との間主観的次元を垣間見させるという議論構成になっており，この点で両著作の差異が見られる．

第 6 章で，本研究は「顔の彼方」としての「エロス」を分析する．この章の議論の特徴は，エロスを繁殖性から切り離して考察することにある．もしエロスが繁殖性の観点からしか考察できないとしたら，レヴィナスにおいてエロスは生殖のための手段としての重要性しかもたないことになるが，しかしそれでは生殖を目的としない行為はレヴィナスによっては説明不能になってしまうばかりか，女性的他者を生殖の手段と解される余地も生まれてしまうだろう．また，この章では「顔の彼方」の意味が，第 4 章で見いだされた「公共性」の否定にあると解釈する．エロスにおける愛撫と官能は，言説関係とは異なった「関係」と「隔絶」の構造を有している．この章の論述は，この独特の構造に注意しつつなされることになる．

３．本論文の独自性

先に述べたように，本論文はレヴィナスが分析する諸現象の構造に着目し，それぞれの現象が独自の仕方で「関係」と「隔絶」を実現していることを見いだすことをめざしている．一般的に，レヴィナスのいう他者は把握しようとしてもその把握からどこまでも逃れていく他者であるなどと解釈されたり，他者の他性は他者に無限の属性があることから可能となるなどとされたりすることがある．しかし，こうした理解は，レヴィナスがどのように現象分析をおこなっているかを無視した解釈であるように思われる．レヴィナスのいう他者はさまざまな現象において別の意味で他性を有している．本論文の考察から，「把握から逃れる他者」という表現は，少なくとも一面的な理解にすぎず，これにより他者の他性の多様性が見失われていることが指摘できるだろう．レヴィナスが現象学者としてどのようにさまざまな現象を分析して，そこからその現象の仕組みを取りだし，他性を肯定できたのか，さらにひるがえって，その他性とかかわる主体の独立性を肯定できたのか，こうした問題について，本論文は，各著作の記述に寄り添い，独自の解釈を提示することを意図している．